

報告 4

私が見た AJAPE の「虹の架け橋教室」

羅 朝子（日本ペルー共生協会）
xujun_wang@yahoo.co.jp

「架け橋教室」が来年で終了する。とても残念に思っているが、「フォーラムで発表してくれませんか」という依頼が来るまで、このことについてはあまり深く考えたことがなかった。依頼を受けてから、AJAPE の「架け橋教室」で自分が今までやってきたことや、「架け橋教室」の存在意義などいろいろと考えさせられ、また保護者の方々のお話を伺ったことによって、「架け橋教室」は実に素晴らしい有意義な事業だと気づいた。

報告者は大和市の小中学校で外国人児童生徒教育相談員として中国から来た子どもをサポートする仕事もしている。相談員の仕事と AJAPE での仕事を同時に行っている報告者の目で見ると、両者の違いがはっきり見えてくるし、「架け橋教室」は子どもにとって欠かせない重要な存在であることも分かる。今回は、現場担当者の一員として AJAPE の「架け橋教室」について報告させていただきたい。

報告者が AJAPE の「架け橋教室」に加わったのは二年近く前のことである。ご存じのように、AJAPE ではいろんな国から来日した子どもたちを支援している。小さなインターナショナルスクールと言ってもいいほどだ。報告者は中国人の子どもを担当することが多いが、AJAPE では共通のカリキュラムが設けられている。主に使用される教材は『こどものにほんご』、『絵でわかるかんたんかんじ』3冊シリーズ、小学校国語教科書である。

カリキュラムは日本語コーディネーターの矢沢さんが作成したものである。カリキュラムにはその日に学習すべき言葉、文型、表現など細かく記載されている。指導スタッフはそのカリキュラムに基づいて、授業を進めていく。そして、授業のあと、担当した子どもの引き継ぎノートに学習した内容や、子どもの様子などを細かく記入する。それに、月一回のミーティングもある。ミーティングでは意見交換を行い、矢沢さん、高橋さんからアドバイスも得られる。報告者は、引き継ぎノートやミーティングがあることでたいへん勉強になっているし、子どもたちへの指導に役立てている。

来日直後の全然日本語が分からない子どもは、こういうふうに、AJAPE「架け橋教室」で細かい集中授業を受け、効率よく短時間で日本語を覚えることができ、学校入学の基礎を築いていく。

もちろん、「郷に入れば郷に従え」ということばのように、外国から日本に来た場合、報告者がそうであるが、日本社会のルールも知らなければならない。AJAPE「架け橋教室」では、子どもたちに日本の習慣やルールを細かく指導している。例えば、「明る

くあいさつする」や、部屋に入って靴を脱いだら「自分の靴をそろえる」や、何かを使いたい、したい時「先生の許可をもらう」など、毎日の繰り返しで、日本語で自分の意思を表せるようになるだけではなく、日本のルールや習慣も身に付くのである。

もう一つとてもいいと思うのは、AJAPE「架け橋教室」では日本語のマスターだけではなく、異国の日本で新生活を始める際に感じる緊張感、ストレスなど心理的な負担もかなり軽減されることである。

AJAPE は学校と違って、一対一か、一対二の授業なので、細かく対応できるし、指導スタッフのほとんどは長年外国人に対する日本語教育に携わってきたベテランなので、分かりやすい言葉で話してくれる。それに、周りは自分と同じような境遇の友だちばかりなので、共有感や安心感も得られる。実際、AJAPE に来た子どもたちは、最初はとても緊張して、表情が硬いが、1週間も経たないうちに表情が柔らかくなり、休憩時間にはほかの友だちと遊ぶようになる。

以上話したように、「架け橋教室」は日本語が分からない子どもたちが日本で受けていく教育の最初の一步を始めるのに重要な役割を果たしているが、教師の立場でどんなに AJAPE「架け橋教室」の必要性を訴えても、実際に支援を受けてきた・受けている子どもたちやその親がいいと思ってくれなかったら、何の意味もない。言うまでもなく、「架け橋教室」の存在意義について最も説得力があるのは、通っている子ども及びその親の意見である。報告者は、今年四月から参加した3つの家庭の中国人の親からアンケートを取った。中学校1年生の親、小学校4年生と1年生の親、小学校5年生と1年生の親である。

「来日直後すぐの学校入学と AJAPE で少し日本語を習ってからの学校入学とどちらがいいか」という質問に対して、3人とも「もちろん日本語を習ってからの入学がいい」と答えた。

「それはなぜか」に対して、「日本語がまったく分からない状態でいきなり学校に行っても、授業内容どころか、あいさつも指示も言葉が通じないので、子どもに不安や自己否定など心理的な負担がかかるし、勉強も遅れてしまう。やはりある程度日本語がわかるようになって、日本という環境、日本での生活に少し慣れてから入学したほうが安心する」という共通の回答だった。

ほかにもいろいろと話してもらえた。報告者が考えさせられた話もあったので、以下、親たちの話を紹介する。

A (中学1年：2014年4月～6月在籍)

父親：AJAPE はたいへん役立ちました。うちの子はもう AJAPE を卒業しましたが、これから日本に来る子どもたちのために、続けてほしいです。

B (小学4年：2014年5月～6月、小学1年：2014年5月～現在在籍)

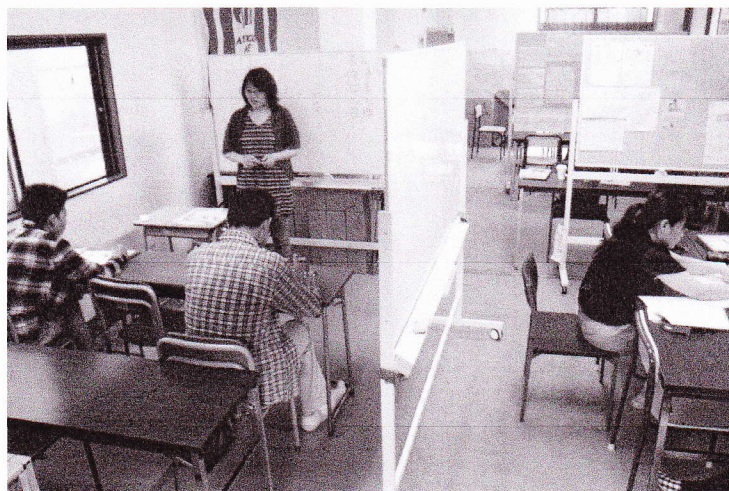
母親：AJAPE で1か月勉強しただけで、ひらがなも全部覚えて、家で絵本も音読できるようになりました。自分のような親は仕事が忙しく、日本人と接する機会はありません。日本社会と隔離された状況なので、長年滞在していても、日

本の社会はあまり分かりません。AJAPE では日本語の勉強だけではなく、日本のルールなども教えてくれたり、多くの先生と接することによって、この身で感じたりすることもでき、とても良かったです。自分たちがお金を出してもいいから、「架け橋教室」を続けてほしいです。

C (小学5年：2013年9月～現在、小学1年：2014年4月～現在在籍)

母親：子どもはAJAPEで楽しく勉強しています。スクールバスもあって、非常に助かります。学校だったら、知識も勉強するので、まだ言葉が通じない子どもにとって、大きな負担になりますから、最初の段階でAJAPEでは日本語だけ勉強するのはとてもいいことです。子どもが順調に日本の学校生活に慣れることは親が安心して仕事することにもつながります。ですから、少子高齢化が進んでいる日本が外国から人材を受け入れる際には、その子どもたちが日本で順調に教育を受けられるかどうかの一つの考慮点でしょう。長い目で見ると、「架け橋教室」事業は日本社会にも大きく貢献します。

保護者の話にあるように、目の前の現実から未来まで、個々の家庭から日本社会まで、「架け橋教室」が必要とされている。長く広い視野でこの事業が続けられることを願っている。



<教室での授業>

今後子どもたちにどのような支援・対応が望まれるのか

伊東 祐郎氏
東京外国語大学留学生日本語教育センター教授
日本語教育学会会長

今、ご紹介いただきました伊東祐郎と申します。

仕事は、東京外国語大学で留学生に日本語を教えています。ペルーを始め、南米や世界各国から45か国以上の留学生に対して日本語を教えています。

ただし、留学生で成人として日本に來ている学生たちですので、日本語を教えれば、あとは自分たちで生活もできるし、自立して積極的に日本の生活を楽しめるという点では、我々は日本語だけを教えているという、楽な仕事をしているなど、今日感じました。

今日は、第8回教育フォーラムにお招きいただきまして、まず、感謝申し上げたいと思います。なぜ、感謝申し上げるかと申しますと、文科省の外国人児童生徒のための日本語教育に関しましては平成8年から携わっております。当時、日本の小中学校に外国人児童生徒がいる、そして、現場の先生方が非常に困っていらっしゃるから、カリキュラムを作ってほしいという依頼を受けたのが最初でした。今から18年前のことでした。私たちも、留学生に対する経験がありましたので、「お役に立ちそうであればお受けします」ということで、ある意味で今から思うと安請け合いしてしまったんですね。なぜ、安請け合いしたかということ、やはり、留学生に対する日本語教育と年少者、まだ母語も十分に確立していない子どもたち、なおかつ、親や保護者の都合で日本に連れてこられた子供たちというのは、留学生とは随分違います。今日の話にあったように、目標があって、自分の実現したいことがあって日本に來た子どもたちばかりではなく、親の都合で日本に來た子供たちの日本語指導と留学生とは随分違っているなどということ、平成8年からカリキュラムを作ることになったのですが、現場に日々赴き、先生や子供と会話をする中で、日本語教育の大変さをずっと感じてきた次第です。

文科省から、「カリキュラムを作ってくれ。」と言われ、3年の間に作らなければいけませんでしたが、それと、日本語能力の評価のテストも作ってくれと言われたので、作らなければいけませんでした。今から思うと、本当にお粗末なものだったと感じます。どういう点かということ、やはり、子どもたちは非常に多様で、留学生教育のように一つの形作られたものでは教育できない、ということを感じました。

多様性にどう対応していくのかというのが、外国人児童生徒の日本語教育の難しさであらうと思います。その対応について申し上げますと、私が平成8年から4年間、文科省の併任専門官をやっていて教育委員会の動きがわかり、先生方とお会いする機会があって、現場の先生ともお話しましたが、いろんな課題ができました。やはり、課題は大きく分けて3つに分けられると考えられました。

一つは、日本人児童生徒と違う、根本的な子どもたち特有の問題ですね。日本語が通じない、そして、日本文化を共有していないという、日本人ではない、というところから出てくる問題です。そしてそのことは、保護者が日本語が通じないという、外国人というくくりで言っていると思いますが、そういった様々な問題があります。

二つ目の問題としては、受け入れた学校の問題ですね。これまで日本の学校は、日本人児童生徒を受け入れるために制度が作られ、カリキュラムが作られ、そして、より良い日本人を育てるためにはどういう教育をしなければいけないか？というところで、ずっとそのために文科省や昔の文部省は教育行政を行ってきました。そして、我々教員もそのために、どう指導して行ったらいいかという形で教員養成を受けてきました。しかし、外国人児童生徒を受け入れる1990年以降、難民が入ってきた、あるいは、日本政府が国連の児童憲章に批准してから、義務教育の段階で国籍を問わず、日本の小中学校の門戸をたたいた場合には受け入れなければならないということで、我々も、本当に受け入れなければいけなくなった。しかしながら、学校自体が、受け入れるための体制が整っていないんですね。そして、私たちが平成9年、10年に全国調査をした結果、どんな人たちが日本語指導をしているかを調査したところ、その当時、（今もあまり変わっていないと思いますが）小学校でいうと、国語の先生が児童生徒の教育をしている。中学校でいうと、「あなたは英語ができるでしょう？」ということで、外国語ができる英語の先生がたまたま受け入れるということになってしまった、ということがありました。ある学校では、校長先生が校長室で日本語指導をしているということも、少なからずありました。そんなことで、突然やってくる外国人児童生徒、日本語が分からない外国人児童生徒にどう対応して良いかわからないという、学校側の体制作りが難しい課題だったと思います。

最後の一つは、受け入れることになった時に、やはり、言葉が通じないということで、小中学校の先生や、前の先生方の戸惑いが何をどうしてよいかわからないという、日本語指導、あるいは適応指導、そして文化的な異文化間適応をどのように子どもたちに伝授していったらいいか、というところでした。我々教師は、教科学習の訓練は受けていますが、外国人児童生徒を受け入れるということに関しては、あまり訓練を受けてないんですね。そういう点で、教員養成をどうしていくか、受け入れ体制をどうしていくか、

そして、受け入れるための人材をどうしていくかということ、私は、この三つが大きな課題だなと思いました。

今日のお話を伺っていて、高橋さんの、大和教室のこれまで、という点で、かなりのことが実践されていると思いました。それと同時に、実践の中で重要なことは、子どもたちの様々な課題をどう解決していくかです。これまで我々が経験したことのない、いろんな課題があるということを考えますと、日本語指導だけでは解決できない問題もあります。学校だけでは解決できない問題もあります。そして、親御さんだけでも解決できない問題もあります。そういう点で、それを大局的に把握できて、その解決のために、いかにコーディネートできるか、という、そのコーディネーション力のある人材を私たちは輩出していかないと、この問題は解決できないなと思いました。

平成8年に調査を行ったときに、外国人児童生徒の教育に携わっていらっしゃる方は孤軍奮闘していらっしゃるって、その中から自分たちが何をしていかなければならないかについて、歳月をかけて、取り組んでこられました。やっと経験や実績からノウハウができあがり、体制や受入のシステムが、この十数年の間にいろんな形で共有できる状況になってきたと思います。

外国人児童生徒のいる学校を調べてみると、8割から9割ぐらいは、5名以下とか10名以下ということで、学校にいる外国人児童生徒の数が少ないという所がまだまだ多いです。群馬県の大泉とか、こちら神奈川県の大和市などは、ある意味で集住都市なので外国人児童生徒の数が目立っていますので、何とかしなくてはいけないと、教育委員会や学校も対応を積極的に推進していらっしゃいます。しかし、全国を見渡すと、まだまだ8割から9割ぐらいの学校では外国人児童生徒が10名以下と目立たないので、体制的、あるいは財政的にまだまだ十年以上前と同じように先生方が孤軍奮闘しているところもあるという状況も見取れると思います。

そういうことを考えますと、この「虹の架け橋教室」で実践されていることは、非常に進んだ取り組みであると思いました。非常に進んでいるなということを感じたのは、やはり、コーディネーションをうまくやっていらっしゃるなということです。それが、今日の日本ペルー共生協会の高橋さんが「メディエーター」として活躍されているということ、矢沢さんがお話なさったと思いますが、このメディエーターの役割が非常に重要だなと思います。それは、やはり、子どもの生活は地域、大和市での生活と、学校での生活と子供たち同士のつながりがありますが、そのつながりをどうつなげていくかという、そこをメディエーターとしての高橋さんを始め、日本ペルー共生協会の方たちが担っていらっしゃるなということを感じました。

ですから、まず一つには、これまで我々が体験しなかったことを、そこから出てくる課題を、どう解決していくかという、課題の所在を見分けて、どこに、根本的な問題があるかを突きとめていって、その解決にはどなたが解決してくださるのか、そして、どういう機関が、どういう人たちが解決に共鳴してくださるかというそのメディエーターの役割は非常に大きいと思います。

私自身の経験からもいろんな課題は山積です。各学校、各教育委員会。しかしながら、その課題の所在を見極めて、どこにその原因があるのか、一つには、先ほど、三つの問題があると言いましたが、外国人特有の彼らが抱えている問題なのか、学校の体制側の問題なのか、あるいは教育指導ということで教育の方法が分からずに、悶々としていらっしゃるのか、そこを突き詰めていって、その解決のためにはどうしたらいいかということを探求していく、その役割を担う人がいるかないかで、全然違うということを、今日の発表で感じました。

教育内容で申し上げますと、いろんな取り組みをしていらっしゃるなと思いました。外国人児童生徒は、それぞれが違う。その違いは、いつ何時、日本にやってくるかわからないということと、母国で受けていた教育もさまざまなので、同じ学年、学齢であっても国が違えば、年齢が違えば、そして母語が違えばさまざまだということで、その個々の対応が最も求められるところです。その対応が本当にきめの細かいやり方でやっていらっしゃるなと思いました。ですから、「虹の架け橋教室」で対応されている授業の実施状況を見ても、不登校・不就学の子どもへの対応に関しても、「日本語ができないから無理だ」、ではなくカウンセリングまで踏み込んでやってらっしゃるのは、非常に高く評価できるなと思います。日本語ができないと、つい、我々は「これは、日本語の問題ね。じゃ、もっと日本語を学びましょう、もっと勉強しましょう。」というように考えがちなんですが、そうではなくて、家庭の事情を調べたり、あるいは保護者を巻き込んで、保護者と面談することによっていわゆる子どもの教育を教室のみならず、学校のみならず、保護者を巻き込んで一緒に子どもを育てていくという、全人的な取り組みをしていらっしゃるのはすごくいいなと思いました。

それでも解決できない問題はあります。それは、見知らぬ国、見知らぬ土地へ連れてこられた子どもたちは、たとえ親たちと一緒に来たとしても、これまでペルーで培ってきた自分自身というものが根こそぎ取られて、そして日本に連れてこられたことによる精神的なショックとか、予想もしなかったような心の傷のようないろんな状況に遭遇して、子どもたちもおそらくはショックを受けている。そういう中で、日本語教育関係者だけでは解決できない、学校の先生だけでは解決できない、教育委員会の皆さんだけで

は解決できない問題、そこにはやはり、カウンセラーの必要性も非常に役割を担っていると私自身も感じています。その手当てをどうするか、ということも今回の発表を聞いて、そのような対応をしていращやるということで、非常に多岐にわたる対応をしていращやるなということを感じました。

高橋さんの仰っていたことで印象的だったのは、その最前線にいるのが日本語を指導している日本語教師や、教科指導をしていращやる先生方ですが、その課題を全部一手に引き受けてお一人が解決するのはむずかしいですね。やはりその時に、情報を誰と共有できるのか、誰とつながっていくのが一番いいのかというところを、やはり、システム、体制を作っていくのが重要ななと思いました。そういう意味で、高橋さんのレジュメの「全体コーディネーターとして教育委員会、学校、保護者、カウンセラーとの連携や連絡」、やはりここをつなぐというのを、わたしは非常に高く評価すべきだなと思いました。そういう意味で「虹の架け橋教室」がただ単に日本語指導や、教科学習の機能のみならず、このような各教育機関や保護者、カウンセラーとつながりを実現できる中核的な役割を担っているのが、本当にこの「虹の架け橋教室」だなど、今日、改めて感じました。全国、いろんなところに「虹の架け橋教室」がありますが、全てがこのような形で中核的な機能を担っているとは限りません。そういう意味で、今回、深いお話が聞けたということで、「虹の架け橋教室」の重要性を改めて感じております。今日の発表にもありましたように、実はこの「虹の架け橋教室」は、二、三年前にいったん予算が尽き、これで終わりということだったんですが、やはり、おそらく、大和市の強い要望や全国いろんなところの強い要望があって継続になったんだろうと思いますが、私も来年あたり、やはり是非継続できればいいかなと心から願う次第です。

そして今回、いろんなことで感じましたのは、子どもというのは非常に感受性が強くて、敏感であるので、そのことに対しても適切に対応していくというのが矢沢さんからの報告で感じられたところです。教材の選定や、教える内容、教え方もただ単に、日本語を教えて終わりというのではなくて、教科学習につなげるという、子どもたち本来のいわゆる発達、そして学力、そして思考力を伸ばすためには、どうしても教科学習につなげていかないと、子どもたちの進学も含めて将来の実現可能性の芽を摘んでしまいますので、ここを意識した取り組みが、非常にいいなと思いました。平成8年、私が駆け出しのころは、「日本語指導をどうするの？」ということで、「日本語ができないから、日本語を教えなきゃいけないね。」というのが一般的な考え方でした。しかし、15、6年以上経った今日は、「教科学習につなげていくにはどうしたらいいか？」ということ

が、一番大きな課題です。

日本に、1、2年もいれば、話し言葉は流暢になりますが、話し言葉が流暢になったからと言って、やはり、現学級、教科学習の教室に戻ると、読めない、書けないということがありますので、そのことを、どう、我々は捉えて、対応していかなければならないかというのが、一番の重要な問題です。したがって、そのためには我々は、どうするかといったときに研修が欠かせないんですよ。研修や、いわゆる教師自身の自己開発というのがどうしても必要になってきます。そういう意味で、この「虹の架け橋教室」に従事していらっしゃる先生方はおそらく、日本ペルー共生協会の高橋さんがいろんな機会を設けていらっしゃるの、その自己啓発的なところでの取り組みもすごく積極的なんだろうと、私自身も感じています。高橋さんとのお付き合いも、私自身も長いのですが、去年、「虹の架け橋教室」に直接お邪魔させていただいて、一緒に研修を受けさせていただきました。それは、今日の話にもありましたように、子どもたちの能力をどう評価するか、そしてどう教科学習につなげていくかという研修を積極的に何回も開催し、そして教師の自己啓発に取り組んでいらっしゃるというところは、じかに私も体験させていただいて、それを実践していらっしゃるというところは、すごくいいなと思いました。子どもが多様なので、その多様な取り組みをどう私たちが、実践していくかというのは、やはり、これまでの研究成果を踏まえた理論的なことをある程度学ぶ必要があるなと感じています。これまでの学校教育や教員養成の世界ではなかなか、そういうチャンスが無かったので、やはり、やりながら、実践しながら、試行錯誤しながらやっていくというのが、現状ではないかと思いますので、大変だという気はしますが、それを併せてやっていらっしゃるというのは、非常に頭が下がるなと思いました。

高野さんのお話の、学校とどうつながっていくかという点で、すごくいい示唆があるかなと思いました。やはり、子どもたちが多くの時間を過ごしていくのは、学校の現場であるので、「虹の架け橋教室」が最終目標の場所ではない、最終の到達目標の地点ではないということを考えると、日本の小学校、中学校のその学校で子どもたちがいかに自立して、楽しく過ごせるようにするかというのが、私たちの最終目標であるということと考えますと、学校の先生方や、学校の皆さんと、いかにこの「虹の架け橋教室」と学校教育の接続をつないでいくかというところが重要だということと考えますと、「学年便りをまず出してください。」と呼びかけをし、それをこちらに貼って子どもたち、また我々自身が学校の行事と合わせる形で指導に取り組んでいく、ということは、すごくいいなと思いました。そして、それと同時に、学習上の課題を学校の担任の先生と共有することによって、このことがつながっていく。そうしますと、私は、学校の先

生も「虹の架け橋教室」に行っている子どもたちの存在を知ることによって、また、「虹の架け橋教室」の先生方が学校に働きかけることによって、情報を提供されることによって「子どもたちは、こんなことをやっているんだ、あんなことをやっているんだ。」ということが把握され、そしてそのことが次第に大きなパイプになって、そして、お互いの連携や協働実践ができたらいいかと思います。

私は、文科省の併任専門官をやっていました。ですから教育委員会の皆さんとはいろんなお話をするんですね。しかしながら、地域のボランティアの先生方や、地域で日本語教育指導をやっている先生方の話を聞くと、やはり、「日本の学校は敷居が高い、だから、なかなか子どもたちの教育で学校の先生と話をすることはできないし、ましてや教員免許がないと学校に入ることができないので、子どもたちの支援が、なんか中途半端でおわってしまう」という話をよく聞きますが、私は今回の「虹の架け橋教室」の皆さんが、学校とうまく連携を取り、保護者への働きかけをしていらっしゃるということで、子どもたちを全人的にトータルで把握し、そして、地域と学校と「虹の架け橋教室」でトータルで育てていこうという、そこに非常に大きな意義があるなと思いました。

教育行政のみならず、日本の行政はどうしても縦割り行政で終わってしまっていて、「学校以外は知らないよ。」とか、「ここの国際交流協会のしごとはわかるけれども、学校は知らないよ。」という人は多いですが、やはり、一人の人間が朝起きて、夜寝るまでいろんなところにお世話になるということを考えますと、それぞれが連携していくことは非常に重要じゃないかなと思いますので、協働、垣根を超えた協働をどうしていくかというのは、非常に難しいことではあります。それは、我々が、知らないからということもありますし、それを実践するには勇気もいるし、これまでの殻を破らないといけないということで、パワーがいるんですよね。そこを、「誰がするのか？」となると、「メディアエイター」や志のある人になってくるかなと思います。

「虹の架け橋教室」が取り組まれたことが今後、ますます、うまく協働・実践、そして新たな教育体制を創造していくような仕組みとして発揮されていくことを切に望む次第です。参加すること、そして何かを新しく問題解決のためにみんなで協働で取り組むこと、そして何か新たなシステムが作り出されること、そんな形で今後大和市のいわゆる皆さんの活動が、推進されるといいかなと思います。

簡単ではありますが、感想とコメントをお話させていただきました。

フロアとの対話

高橋：教育委員会と地域のグループはなかなかうまくいかないところが多いのですが、私たちは「なぜ？」と言われるくらいにいい関係を作って、いつも連絡をしいながら、子どもたちの支援に対応しています。大和市教育局指導室の清水先生です。

清水：「架け橋教室」につきましては、本当にお世話になっております。先程の、大事なポイントというところで、「子どもたちの心の支えになっている」という話が出ていましたが、子どもたちの心の支えだけではなく、学校の支えにもなりますし、そこを橋渡しする我々教育委員会の心の支えにもなっていて、相談に来られて、「日本語が全くしゃべれないんです。でも、学校に入学したいんです」という話が来た時に、「じゃ、こういうところで、日本語のトレーニング少ししてみませんか？」ということ、すぐに紹介できるという場所があるかないかということは、非常に大きくて、これが今年度いっぱい無くなってしまうという話を伺い、私も愕然としました。でも、やはり、何かそこに代わるものを早急に作っていかねばならないし、学校自体もどんどん力をつけていかねばいけないという時代になってきているのかなと思います。

そのために、何ができるのかというのは、まだ全然手探りでわからない状況なのですが、子どもたちが笑顔で学校へ通えるように、できることは精一杯尽力していきたいと思っています。どうぞよろしくお願いします。

高橋：国際化協会の船越さんにも、おいでいただいています。国際化協会には、いつもプレススクール開催の時にいつもお世話になっております。また、市側のアドバイスもこちらの地域の団体にもいただいております、本当に頼りにしている方です。

船越：お話を伺っていて、「メディエーター」という話もありましたし、大和市では協働事業で他のNPO法人さんとやっているものもありますが、プロボノという専門家とをつなぐ必要があるといわれる中で、それぞれの学校現場において、人が足りない、忙しいということがありますが、それぞれが自分の力だけで解決しようとしなくていいということが大事だということがわかります。もちろん縦割りの部分もたくさんあるのですが横につながっていくというのが大変重要で、そのためには誰かがそこをやらねばならず、勇気も、パワーもいりますが、そういうことを志す人がいるのも確かだ

と思います。組織はあっても、いろんな分野では「人」というのが大変重要で、そういう「人」が大和市の場合何人かいらっしゃるの、それがつながっていくということ、国際交流の分野では支援をしていこうと思っています。

高橋：私たちが IOM に事業の申請をする時に、大和市の校長会の校長先生にも、お願いをしております。大和市公立中学校校長会の篠原先生ですが、いつも、職員室で、子どものこととお会いしてお話をさせていただいています。

篠原：こんにちは。引地台中学校の篠原と申します。よろしくお願いいたします。高橋さんと出会ってから、多分、4年ぐらい経つと思います。今は引地台中学校にいますが、その前の光丘中学校に勤務していた時に、ボリビアのお子さんが通うことになり、その時に実は初めてアハペという存在を知りました。今日は、参加させていただいて、私自身がアハペのことがよく分かりましたし、「虹の架け橋教室」のことも正しく理解できるようになったということで、本当にありがとうございます。

高橋さんには、一昨年も、〇〇中の方から本校に、スペイン語圏の女の子が来た際にお世話になりました。本校には今、20人を超える外国につながる生徒がいます。国籍は本当に様々で、もちろん国際教室は設置はされていて、実際には11人ぐらいの生徒がそこで学んでいます。中には日本国籍の生徒もいるので、外国につながる生徒で外国籍というのは、9名しかいませんが、一昨年、その女の子が来た時に、伊東先生のお話にあったように、国際教室の担当が語学に堪能なものばかりがいるというわけではないので、基本的には日本人の教員なので、日本語指導をするのですが、やはり母語でないと通じないところがありました。指導で困って私が最初に思いついたのが高橋さんです。担当教員に「すぐに高橋さんに連絡をして。」と、何の脈絡もなく勝手に高橋さんに電話をして、学校の方においでをいただいて、通訳をしていただきました。

高橋さんのレジュメの「課題」の4番目に「教育委員会や学校では難しい支援があるのではないか、地域の団体が引き続き担うことができないのだろうか」と書かれていますが、今お話をしましたように、学校現場としては、アハペの存在等はすごく学校の指導のためになる大きなところがあるので、是非、何らかの形で継続をしていただきたいと思います。

お礼を含めて、お話ししました。ありがとうございました。

高橋：以前、教育委員会で指導主事をされていた丸山先生です。今回は、大和市の小学校校長会という形でご参加いただきました。

丸山：色々、お話を聞く中で、高橋さんとの昔を思い出していました。10 年ほど前になりますが、私が教育委員会にいたころ、スペイン語に関わる子どもたちへの対応をお願いしました。

いろいろ聞かせていただいた中で思ったのは、こういう活動を継続することの重さ、深さです。今振り返ってみると、その重さ、深さを改めて感じさせられます。あの頃小学生、中学生だった子どもたちが今はきっと立派に社会に巣立っているだろうと思います。

先ほど、伊東先生がおっしゃった、人材育成ということについてですが、「継続は力なり」と関わって時は流れていくわけで、必ずや人と人とのつながりが、人を育てていく。すると、大きな社会を作っていく、そうすれば、子どもたちの力になって育てていくことになるというのは間違いがないだろうなと思いました。併せて、この活動が、子どもたちが、日本人だとか、ペルー人だとかということに限らず、大きく国際人としての力をつけていくことになるのではないかなと思いました。

これらの活動が、充実していくように、願うばかりです。

高橋：大和市立林間小学校の校長先生、三浦先生です。先生にはプレスクールの学校見学の時に最初にお会いして、見学をさせていただきました。

三浦：私が若いころ、難民定住センターのお子さんを担任して、正直、何もできなかったです。本当に申し訳なかったなと思っています。それに比べて、この「虹の架け橋教室」に行ける子どもたちがどれだけ幸せかと思います。

深見小の前に大和東小におりまして、そのあたりからずっと学校の子どもたちが（アハペに）お世話になっていたんだろうなと、思います。深見でもお世話になり、そして林間小でもお世話になりということで、非常に大事だなと、改めて思いました。

羅さんがおっしゃったように、やはり、子どもたちのためだけでなく、日本社会のためとか、世界のために大事なことだと思いますので、是非、この活動を継続していただきたいと思うとともに、伊東先生のお話にありましたが、我々学校現場は、はたして（以前の）その時代からどれだけ体制ができているのかを、非常に反省するところもあります。ですから、教育委員会とも今後、色々連携を取りながら、協力して、子どもたちにとって良い環境作りをしていきたいと思っています。

高橋：国際移住機関、IOM の駐日代表、ウィリアム・バリガ氏にもお越しいただいております。一言お願いいたします。

バリガ：（通訳：IOM 就学支援事業担当 山野上 麻衣氏）

国際移住機関 IOM の駐日大使を務めておりますウィリアム・バリガと申します。
本日のお話の中にもありまし、皆様、「虹の架け橋」事業の背景というのはよくご存知とは思いますが、また簡単にご説明させていただきます。

日本では、リーマンショックとして知られる 2008 年から 2009 年にかけての世界経済危機を受けて、特に日系人のお子さんが、経済的に厳しい状況に親御さんが置かれるということで、学校に子どもを通わせ続けることが難しいという状況がございました。

ただし、この現象は日本に限ったことではなく、世界経済危機の中でいわゆる外国人労働者という存在は、どちらの国においても非常に影響を受け、その子供もまた影響を受けたということは、世界共通でございます。

世界経済危機に際して、たくさんの日系人が母国へと帰ったことも事実ですが、その一方で、日本に残るという選択をした家庭が多かったことも事実です。このことは、直接に当事者である保護者や子どもに影響を与えたにのみならず、大和市でもそうであったように、各自治体においても大きな影響を与えるものでありました。そこで、日本の中央政府である文部科学省の方から、一つの解決策として、この「定住外国人の子どもの就学支援事業」、通称「虹の架け橋教室」が作られることとなりました。

この「虹の架け橋」事業の趣旨としましては、ブラジル人学校等から日本の学校へ移るお子さんもいらっしゃる。不就学の状態から学校に入るお子さんもいらっしゃる。このようなお子さんたちが円滑に公立学校等に転入ができるように、日本語などを指導するということを主眼にして始められました。当時、日本政府においては非常に巨額な金額をこの事業にかけまして、日本円で 37 億円というお金がこの事業を全国において展開するために準備されました。

さまざまな方からのお話にもありますように、「虹の架け橋教室」は今年で 6 年目を迎えますが、今年度で終了という見込みになっております。ただ、ここで一つだけ言えるのは、この事業が世界中において非常に稀有な珍しい存在であったということで、地元の日本の社会に入っていく支援をしていく上での非常に重要な試みであったということです。

これで最後にはなりますが、まずは日本国政府の文部科学省への感謝の気持ちを述べるとともに、実施団体はたくさんありますが本日、この素晴らしい会を開いていただいたアハペの皆様、そして事業をサポートしてくださった大和市の皆様に深くお礼を申し上げる次第でございます。